# 日本の桜

日本の桜といえば、断然、ソメイヨシノ（染井吉野）である。

ソメイヨシノは江戸時代末期に東京の染井という地で植木職人が、エドヒガンザクラ（江戸彼岸桜）とオオシマザクラ（大島桜）という異なる品種を交配させてできた新品種の桜です。花が咲いている間は、葉が出来ないので木には花びらだけが占有しており、その美しさは他の品種と比べて格別です。

## 枝垂れ桜

私が毎日散歩している大津渚公園の近くにある枝垂れ桜をまず紹介する。白とピンクの桜木には、満開時には葉がないので、やはりソメイヨシノ系なのだろうか。花びらが散るとすぐ葉桜となり、秋には紅葉し、冬には散り去ってしまう。桜の和歌で有名な西行は旧暦 2 月 15 日に亡くなったそうだが、その日はユリウス歴で 3 月 22 日なので、下の和歌のとおり満開の桜花の下で入滅したのだろう。

私が住む大津市の長等神社にはかなり濃い紅色の枝垂れ桜がある。この桜に縁のある和歌は、平（たいらの）忠度（ただのり）の

さざなみや 志賀（しが）の都は 荒れにしを 昔ながらの 山桜かな

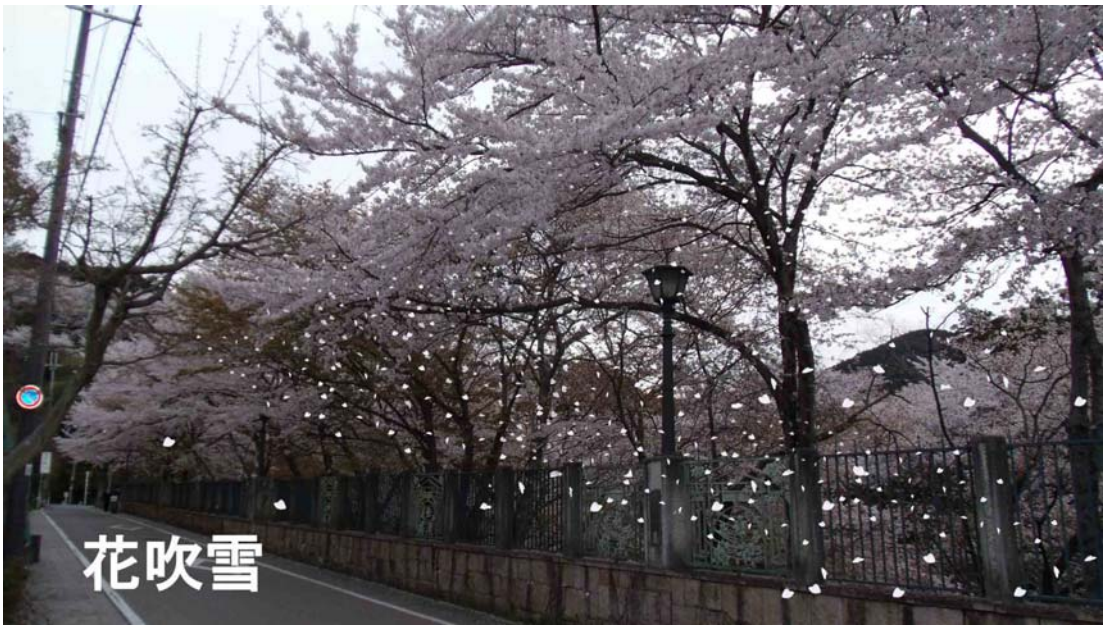
である。さざ波寄せる琵琶湖畔の志賀の都はすっかり荒れ果ててしまったけれども、長等山の桜は、昔のままに美しく咲いている。「さざなみ」は志賀に懸かる枕詞で「ながら」は長等と“ながら”をかねている。勇猛な平家の武将でありながら風雅の人平忠度は、都落ちの際に、歌の指導者・藤原俊成にこの和歌を託し、間もなく一ノ谷の闘いで戦死した。俊成は忠度が朝敵になったので、この歌を「読み人知らず」として『千載集』載せた。平家は都で貴族化したので、勇猛な源氏に滅ぼされたが、忠度のような文武両道の人もいたのだ。

もうひとつ有名な枝垂れ桜は北近江の「道誉桜」である。エゾヒガンザクラの品種で初代から数えて三代目と言われている。一本の樹から枝がたわわに広がっていた。私が訪れた 2012 年は例年より春の訪れが遅く、それが幸いして 4 月 17 日でも満開だった。

## 琵琶湖疏水のソメイヨシノ

つぎに、大津の琵琶湖疏水の桜を紹介する。琵琶湖の水を京都市に送るために明治時代に掘鑿された川の両側に水面を覆うように咲いている。

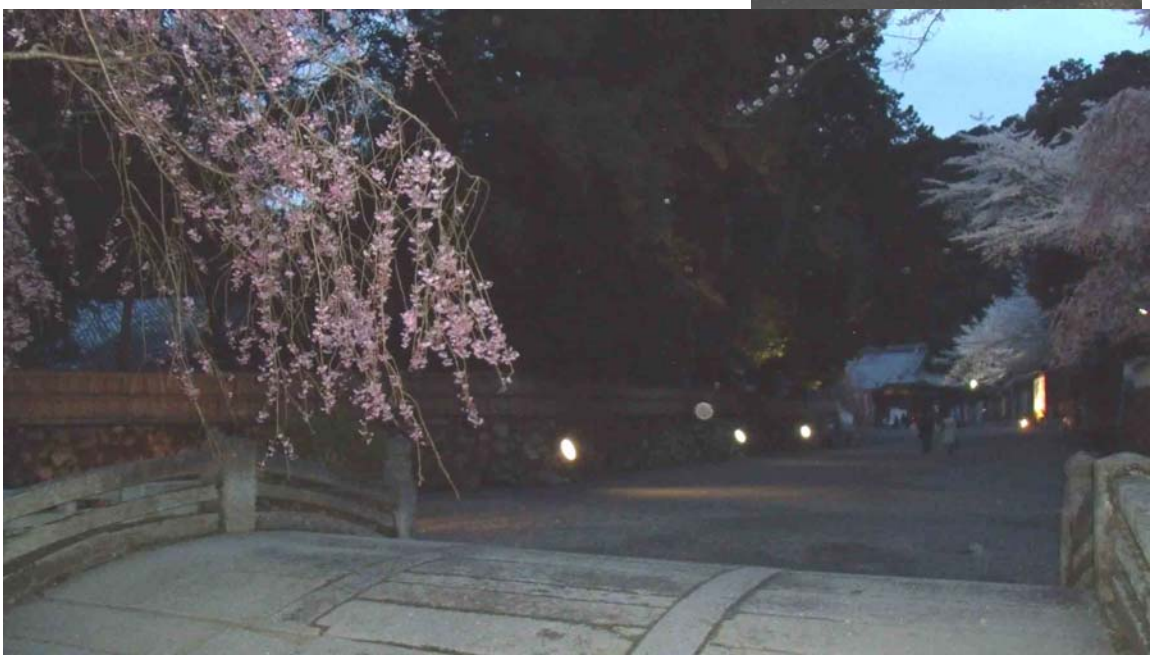
満開の後、花びらは急ぐように散ってしまい、一、二週間の後には葉が生えるので「葉桜」と呼ばれる。
よく人は、散り急ぐ桜をみて、ものの哀れを感じるという。しかし、私には妖艶に咲き乱れる桜に圧倒されるし、散った花びらが琵琶湖疏水の水面を埋め尽くし、昨日も、今日も、そして明日もと、絶え間なく滔々と流れていく（これを「花筏（はないかだ）」と呼ぶ）様を眺めていると、ものの哀れというより、ソメイヨシノの圧倒的な物量感に心奪われるのだ。
風に誘われるように花びらが散る様子を「花吹雪」と呼ぶ。




じつは、花吹雪を鮮明に画像にとらえるのは難しい。だから、上の写真はちょっと合成したものであることを告白いたします。

## 三井寺の夜桜

私の住んでいる大津市にある「三井寺」も夜桜の名所である。
六時半から境内の照明が点灯する。参道の石段には灯籠が足下を照らし、一歩、いっぽと踏みしめて行くたびに、幻想的な夜桜への期待がいやが上にも高まっていく。
徐々に暮れなずむ空の色に反比例して、ライトアップされた桜が鮮やかさを増してゆく。



## 京の桜

京都市には、桜の名所が数限りなくある。川端通りの桜並木は川の両岸を埋め尽くすように桜が満開だった。

川面に垂れる桜の枝から花びらがこぼれ落ちるように咲き乱れる。

# 御室仁和寺の桜

京都市の西郊外の御室に仁和寺がある。仁和寺は、14 世紀に兼好法師が書いた有名な随筆「徒然草」にも出てくるが、ここの桜は、京都市内のソメイヨシノが散り去ったころに満開となる遅咲きの桜として有名だ。お寺の広大な境内の一部、二百メートル四方に桜林があり、200 本の桜が植えられている（写真はインターネットホームページより）。

昔は、この桜樹の下のあちらこちらに床几台があって、花を愛でながら酒食を楽しむことができたが、今は茶店も無くて、飲食禁止となっている。「花より団子」の私にはちょっと不満だが、桜を愛でることで満足することにしよう。なお、入園料は一人 500 円だった。

仁和寺の土地は粘土質のために、通常のソメイヨシノのようには樹の幹が伸びず、地表からすぐに出た枝に桜が咲く（低木の桜）。互いに接している木々から散った花びらが地面に積もっている。その真っ白な花びらは、李白の「静夜思」の承句「疑是地上霜」（疑うらくは是れ地上の霜かと）を彷彿とさせるようで、もし月夜に眺めたら、「霜」どころか「本物の雪だ」と見紛うに違いない。

　最後に境内の五重塔を背景にした桜林をご覧あれ。日本にいて桜の季節に巡り合わせていることの幸せを感じながら、いつまでもこの絶景を眺めていた。そして、俳句の駄作も！

花笑う そしらぬふりの 塔ひとり

桜にまつわる名歌を紹介してこのリポートを終わる。

敷島の 大和心を 人問わば 朝日に匂う 山桜花　　本居宣長

世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし　　西行

2012 年春作成（了）